

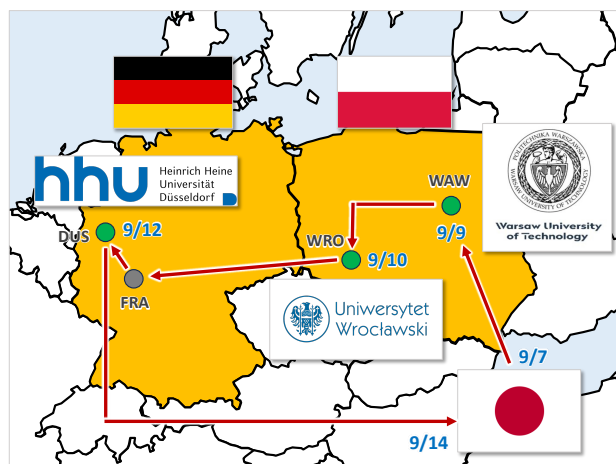
「ポーランド・ドイツの3大学で講演を終えて」

大阪大学大学院工学研究科・助教

A01 植竹 裕太

uetake@chem.eng.osaka-u.ac.jp

この度、第1回「グリーン触媒科学」Green Catalysis Lectureship Awardを受賞し、ポーランド・ドイツの3大学にて講演してまいりました。筆者は博士学位取得後すぐに日本の研究機関で職を得たため海外留学を経験しておらず、元来出無精の筆者も「そろそろ海外に打って出ないといけないなあ」と逡巡していた矢先、このような機会を頂けたことは大変ありがたいことでした。



とはいえ国外研究者とのコネクションもありませんので、訪問先の選定にも逡巡したわけですが、幸い現所属（阪大 櫻井研）では各国から留学生を積極的に受け入れており、ポーランドとドイツで研究を続けているOBがいることから、これを頼りに受け入れ大学を選定しました。日程調整をしてみると4日で3拠点を訪問する弾丸日程となってしまう（さらに、この時期は夏季休暇中と後に知る）、初訪問のポーランドとドイツでゆっくり講演旅行を楽しむという申請時の目論見は脆くも崩れ去った。

最初の訪問先はポーランドのワルシャワ工科大学で、所属研究室に在籍していたArtur Kasprzak 准教授にホストになっていただいた。9月8日の早朝7時にワルシャワ国際空港に到着し、ホテルのチェックインまでかなり時間があったことから、迎えに来てくれた学生にワルシャワ市内を案内していただいた。X線分光を扱う筆者としてはマリ・キュリーの生家を訪れてみたかったのだが、生憎その日は休館日で中に入ることはできなかった。次の日（9月9日）はワルシャワ工科大を訪問。Artur 准教授との再開を喜び、所属学生とディスカッションの後、最初の講演を行った。「有機化学におけるX線吸収分光法」という学際系な内容ということもあり、日本の有機化学コミュニティで講演しても質問が少ないことが多いのだが、ここでは複数質問をいただくことができ、無事終わられたことにほっとした。ちなみにポーランドは欧州の中でもかなりの親日国であり、第一次世界大戦時にポーランド人シベリア孤児を日本政府・日本赤十字社が救済したことをきっかけに今日でも友好関係が続いている。そういった経緯もあり、日本からの訪問とのことで夏季休暇中にも関わらず多くの研究者が講演に訪れてくれたこ

A group of five people (three men and two women) are sitting at an outdoor cafe table at night. The table is set with several glasses, a bottle of water, and a small menu. The background shows a city street with illuminated buildings and a sign that says "KING". The scene is lit by warm streetlights and the cafe's interior lights.

9月12日、旧交のある Bernd 博士とホテルで落ち合い、ハインリッヒ・ハイネ大学

を訪問した。互いの近況について情報交換した後、彼の研究室で行っている超分子化学に関する研究紹介とディスカッションを行った。学生は非常にアクティブかつ快活で、互いの研究成果を「Super interesting!」と言っているのは印象的であった。驚いたことに、学生の一人は筆者の共同研究先（京大）に少し前まで短期留学しており、図らずも縁で繋がっていることを感じさせられた。



講演終了後、いくつかの質問を受けた後、無機化学を専門とする Janiak 教授の部屋に招かれ、ここでも共同研究の可能性について打診された。その際に、早稲田大学（私の母校）にポスドクに行くという学生と面談してくれないかとの申し出があったので、「良いところだ」と伝えておいた。正直ここでの講演はあまりうまくいかなかったなと反省していたのだが、Bernd からは「え、なんで？全然良かったけど。」との評だったのでなんとかなっていたようである。その後の夕食ではドイツ最古のブリュワリーに連れて行っていただき、アルトビールを飲みつつ、ドイツでしか食べられないメット（生の豚挽肉）に舌鼓を打った。ドイツでは「わんこ蕎麦形式」でビールがサーブされる仕組みになっており、能動的な制御が求められるこのシステムは筆者にとっては非常に危険だと感じつつ、全行程を無事に終えることができたことを喜んだ。

若手研究者にとって研究成果を国外でまとまった時間発表するのはなかなか得難い機会であり、大変良い経験をさせていただいた。また今回のツアー中に2度「Are you free for a collaboration?」と言ってもらったことは大きな自信につながった。今後もこうしてできた国際的なつながりを広げつつ、分野の発展への貢献や自身の研究の研鑽を継続していきたい。

最後に、金井求先生をはじめとする国際活動支援担当の先生方、諸々の手続きで大変お世話になりました大井研秘書の深尾さま、野田さまには厚く御礼申し上げます。グリーン触媒科学で行なっている研究とは少し異なる内容で採択いただいたことには、感謝の念に堪えません。